著者インタビュー②

堤 未果

つつみ・みか／国際ジャーナリスト

東京生まれ。ニューヨーク州立大学卒。ニューヨーク市立大学大学院国際関係論学科修士号。国連、米野村證券等を経て現職。『ルポ 貧困大国アメリカ』で中央公論新書大賞、日本エッセイストクラブ賞受賞。『日本が売られる』等著書多数。

日本のデジタル社会の未来像 立ち止まって考えるべき

スマホによるキャッシュレス決済やオンラインでの行政手続きなど、社会のデジタル化が加速している。しかし、生活が便利になる一方で、デジタル化によるリスクを軽視してはならないと訴えるのが、国際ジャーナリストの堤未果さんだ。

「コロナ禍を機に、デジタル化の波が猛スピードで世界を変えています。日本も同様ですが、拙速に進めるのではなく、どんな未来を創っていくのか、立ち止まって考えるべきではないでしょうか。便利さしか見ずに侮っていると、大切なものを奪われてしまう恐れがあるからです」と指摘する。

同書では、日本の行政サービスや金融などの分野でデジタル化を請け負うGAFA（アメリカの巨大IT企業四社）等に個人情報や資産情報が握られ、ビジネス利用される危険性を訴える。

「それだけではありません。私たちは『キャッシュレスなのにまだ現金を使っているの？』『SNSやってないの？』などと言われると何となく肩身が狭くなったり、不安になってしまう。でもデジタル化が遅れているからこそ、日本は他国のデジタル政策や人々への影響を冷静に検証し、失敗や成功から学べるという強みがある。後方にいるからと気後れする必要はありません。むしろそこを生かせば良いのです」

堤さんが最も危惧するのは、教育分野のデジタル化だ。生徒一人一台のタブレット支給や高速大容量インターネット通信環境を小中学校に整備する「GIGAスクール構想」によって、教科書のデジタル化やオンライン授業が増えてくることが予想される。

「少数の優秀な先生がオンラインで多くの子どもを教えれば、効率はよくてもYouTubeを見ているのと同じですよね。人間は対面で触れ合うことで初めて共感を育むことができる。タブレットは効率的ですが卒業式に泣いてはくれません。生身の先生がいなければ、教育は一方通行の〝情報〟となってしまうのではないでしょうか」

また、教育には「問いと答えの間」が大事だという。

「ある問いに対して、答えを得るまでに時間をかけ、仲間と試行錯誤を繰り返す中で、他者に対する思いやり、自分の弱さ、達成感などを学んでゆくのです。私の小学校時代、いつも生徒と一緒になって本気で考え、泣き、笑い、全力で励ましてくれる先生がいました。教科書の中身は忘れても、その先生との時間は今もずっと残っていて、辛い時に勇気を与えてくれるのです。生身の人と人とが触れ合う体験は、決して消えない本当の学びだと思います」

生まれた時からスマホが存在するデジタルネイティブ世代が増える中、実は大人世代には大きな役割があると堤さんは語る。

「スマホで何でもできてしまう子どもたちを前に、私たちは気後れしてしまう。でも彼らは、効率やスピード重視という仮想空間の外にある価値観を知らないわけです。日本にはわびさびや季節の移り変わりを慈しむ心、白黒や善悪だけでない、もっとささやかな営みを大切にする精神性、じっくり丁寧にものを作る文化がある。スマホがなかった時代の幸せな体験を伝えることで、デジタルの外にも美しいもので一杯の世界が存在することを教えてあげて下さい。それは彼らの心に小さなタネを撒き、たとえ今は分からなくとも、いつか花開き、優しく背中を押してくれるはずです。時を超えて私が幾度も助けられた、あの先生のように。

それを次世代に伝えることが、私たち大人にとっての大事な使命ではないでしょうか」

『デジタル・ファシズム 日本の資産と主権が消える』
堤 未果
NHK出版新書／定価九六八円

行政サービス、金融、教育分野のデジタル化が進む日本。性急なデジタル改革は社会に深刻なリスクをもたらすと警鐘を鳴らす。日本はデジタル化でどんな未来をつくるのか、今こそ立ち止まって考えるチャンスだと呼びかける。